



心學道語
七篇中
二十

9
3895
20



門 9
號 3895
卷 20

心學道之語七編卷之中

大道極の清意とがあげらるや極ません。其後外へ

第一の吐を致し、まゝなり。其のものが又

外へまゝに流しと家中でも何某へ心連ふ者と

言ひしれあや。此家中の内も教者老がなすりて

ごふぞと柔腕をふんふものつりて、おきあつんま

まはよちびの極子軽いあんたふ一通りの物でも

おい何でも各器よお違ふれと清柔なよんて

そつらつとそつらつと井戸のそ柔らんまの極も

みちがひあひぬぬもあつらひしものごとと弾判よ

早稲 大學 圖書
昭和 27.6.16 大
藏 書

成て百石下されて侍はぬ者なきがありまうたが
 素より清美のせき由へ忠義一途よ。あうか
 まり出精つゝて心事を大切と致し
 少く候へ出せたまへて今でい余程の高よ成
 てあると申す。今く心懸正道由へ御も我より
 ののがあふあよこやくい大さふあふあふの
 志や。それが小人ドヤと初めれ念のあふ時よ人此
 知らぬやうよ己が徳分よして自分へあふんで
 仕舞由へまごりのるよ小ぬて志り小ぬる成よ
 男の世帯をつくる事一身れゆく世帯も

私があふ由よまを頼いゆ大ましくむくひ中ん小人
 心変ら世界と我とはあふくよある佛法も遂
 故三東城そのふて我よのよ小よかふを扱へて
 籠る由よ世界れりのか皆欲は成てけ身のせえた
 具よある物も申らるるづの為小苦くむ。私が只
 今うの小道活つてん小るく上て自慢を心とみか
 さぬがゆあくくよあさる。是がなつくよ成たて
 由なりますあやまつて下あふ出ると人が騰んで
 ちよふ。さうばとて端らあうり媚らうよるれで
 ござりません。下夜を根をと井戸をさるて仕事

志て居る時盡めしの時を招やまありてめしを
 くらうせいのといひ井戸やまの上つてたぐらといふ
 あまの。兎角我慢と人が悪むあへ。本末無東西
 のもれよ東西南北の四方が出来て迷ひといふ
 めのを建てるもれ。まお生きたる時の素あま
 け方が東け方が西といふも何とあままお雅も
 めくむりのうあひ。世界といつものでたつて心の心ま
 来をさる小陸ふては智慧といふのが出来て
 おまが智慧おれががごとおまが働くおまがま
 とおまがごとといふものを建てるをまおれと

いふ機部を操へては方よ大敵をうけて夜討能
 けけおしもあたるるれあひくるしみ。それを
 け心学ふ入てまつたりつれあしあまのしやこ
 今地まると。今まで故とあまののいれでみるこ
 てあまのものと知てる時と物事らまるとの
 為ふらあまんで居る。扱もくまおらん及しや
 とおまのやうふあまを。まはるやあたる皆樂の
 境界。まをさして換楽とも常光淨土といふ
 こと。まのまとしてまをまおあまのしやあまけ
 だれまの成備こそを悟るやまは十方空の中

またいふごとくは流沙にふるまはれて本心と
 のを失つてはうらうらませ。本心よ本心の心と
 つらむを何も知れぬ本の本心と此の心と
 は心よは善物ぐちやんと依りつてよ
 天子將軍採りつらむと奪多と奪少の心と
 平生一牧の心。世界中の善物ぐちやんとてられて
 物ぐちやんとくの微塵も我の心よの心と
 ません。そとあるよ。孟子曰く。善物皆依り我
 身而微。衆莫大焉。と依りてはる。よの心と

後席

善有善報。惡有惡報。善惡無報。時節未
 到。深耕淺植。尚有天災。利己損人。何無
 禍報。種菽得菽。種麻得麻。天網恢恢。疎
 而不漏。若善惡無報。乾坤必有私
 是の事。林廣記之。善物よ出てあり。善物
 ぐちや。まは。むつて。むか。む。信で。心な。う。ま。ん。ま。ん。び
 乞を。今日。の。心。と。か。の。の。題。よ。致。し。ま。す。善
 善報。惡。を。惡。報。と。り。ま。は。は。善。事。と。れ。ば。よ。ん

報ひらひがあり恐おそるやまればうまい報ひらひがあはさる
 るで神あん儒佛ぶつの二ふた教きょうとも愛あいらつるや何なにも
 おしへを結むすて知るしるともあく今日けふくの上うへで
 よふかてありまふ先まづつ二ふたつあぢて吐はき吐はき
 中なかませふ朝あさ早く眼めがあいておし結むすむふられ
 ぢも中なかをまうして配あはるこそ時ときいと若わかしいやう
 あきども一日いちにちれ用もちひが心の怪あやし出来できておも申まを
 がつわくは舞まてあくわ痛いたくもるあ心こころかたもあう
 よふ使つかを採とれ申まをす是こゝろが朝あさ寐ねむふをまうして若わか
 報ひらひを申まをすので心こころざう申まをすことを朝あさ寐ねむふくで

眼めがさめてもまらつとくこつふてまふく枕まくらえお
 日のあ光ひかりる時とき分ぶんまで寐ねて眼めが覚さえることや今日けふらど
 ちち一いつ使つかはあぬ長なが松まつをあまう使つかはるはるはるはるは
 あぬ是こゝろもせ結むすばあぬあれもあうては
 おうまぬ何なにも痛いたく申まをすつとあつてごつとあうて
 よで一日いちにちれ中なか子こはくしあまでもごつとあうて
 おまらうぬあ。是こゝろも眼めのあやあれはまうこゝろの
 事ことにあままりくよあるあ。寐ねてもあまらう
 うみせらうして熱あつ眩くらが出来できぬ。これが朝あさ寐ねしと
 熱あつ眩くらこつとあまの。よまらうあやが海うみふあうあまの海うみふ

降續たり又日輝であつたり異の附分をかりたり
 して凶のこゝろのふりあつてあつたりおろふてもあまの
 こゝろのふりあつたりあつたり是の百姓の要いのであつたり今日
 の行ひの上でもあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 はし。あつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 しても福はあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 志すは後のふりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 りたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 の終りあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 骨をおつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり

かしはあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 てはあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 事とあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 がある。あつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 いふたあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 程とあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 うてあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 事とあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 ある。あつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり
 去年あつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたりあつたり

所ととましくさけくろ人ぢよありてやくまたぬもの
 でいざりあす。佛^{ぶつ}あで地^ちを善^{ぜん}薩^{さつ}と唱^なへるをけは
 大地^{たいち}の徳^{とく}を繋^{つな}りて地^ちをといふその。まゝに虚^こ空^{くう}を
 善^{ぜん}薩^{さつ}こやへの。善^{ぜん}の徳^{とく}の何^{なに}もあに儒^{じゆ}道^{どう}でいふまの
 天^{てん}の徳^{とく}を善^{ぜん}として善^{ぜん}を善^{ぜん}とあめこのでいざりま
 は大地^{たいち}の徳^{とく}と天^{てん}の徳^{とく}と一体^{いつてい}を用^{もち}をやそのの徳^{とく}の
 美^みやまや豆^{まめ}や取^とのまのものをい大地^{たいち}よまくとまの
 無^むりふ取^とのあるとれがまます。美^みをまけば美^みまを
 うゆれがまが出^いあるとれゆま一^{いつ}程^{じやう}まけは百^{ひやく}増^{ぞう}万^{まん}倍^{ばい}
 ありてい返^{いへん}しふされて下^{した}とふが地^ちを善^{ぜん}薩^{さつ}の徳^{とく}

こそハ取^とらうがまゆ誰^{たれ}でもつて知^してある。ま
 交^{かう}の善^{ぜん}の善^{ぜん}の善^{ぜん}と取^とがあに目^めよとふぬ。ま
 取^とのあに善^{ぜん}や悪^{あく}の徳^{とく}をまめておくと目^めよとふぬ
 いつれるふやうまると百^{ひやく}増^{ぞう}万^{まん}倍^{ばい}よとちやんと返^{へん}
 して下^{した}とふが凡^{おん}人^{じん}もふも豆^{まめ}やまを地^ちに
 植^うてまると豆^{まめ}やまが出^いあるとうの眼^めもふぬ
 まを思^{おも}ひぬ。是^{こゝろ}程^{じやう}のゆかろふくと悪^{あく}の
 取^と徳^{とく}をまめてありまは。早^{はや}まの取^とのあにのこま
 そのともあにまが遠^{とほ}ふだうの。佛^{ぶつ}の善^{ぜん}の徳^{とく}を
 是^{こゝろ}地^ちを善^{ぜん}とて地^ちを善^{ぜん}とぬがまの善^{ぜん}の徳^{とく}

くろくく書てあるおりくろく性があるむり
 冥の里人大勢うつて石の地蔵を建立して立流
 よ出来よつて又百姓の弾劾あらふ出来たれども
 地蔵さぬ又肝心のたましいが遠入ぬぞよふ所出ぬ
 さぬを招請して開眼してとらふいふゆのトやが
 難がよからふこのよと一人の百姓が誰それといふよ
 高僧智識業聖よ此座る甚殊庵の二休和尚とて
 大徳の法出家後由一行て教ふて冥眼して冥ふが
 よありよこの決して業障つとごとく棄りて教ふま
 すと二休和尚とてよく承知して来れ何日と約す

してそよ自ふありあらずと里人男女老少群集して
 今度二休換が由出ふされて地蔵さぬの也冥眼あさ
 まるそうちと教ふん物定めて七火の加勢油で立
 流ふ衣でもめして染るであらふとおひよて居る
 衣二休和尚とてさあばたよ乞食坊主の指さ彼を
 衣を着てまづとてさあばたよ乞食坊主の指さ彼を
 あまが二休和尚といふ扱もく汚穢坊換と思ふ
 て又て居るを教へて地蔵の前へ立とてうつて経でも
 ふむあとおひよを経も鏡ぞよ里人お向あてあられ
 今度度あまの地蔵うりくといふて教をまらして

心學通言之七編卷之中終

